愛宕臨床栄養研究会（ACNC）第76回学術研究会
―炎症性腸疾患におけるチーム医療の重要性―

日　時：平成25年3月15日　午後6時-7時30分
会　場：東京慈恵会医科大学 西新橋校 大学1号館5階講堂
司　会：有廣誠二（東京慈恵会医科大学内科学講座消化器・肝臓内科）

炎症性腸疾患（IBD）を完治させる治療法は現在のところ確立されておらず，薬物治療，栄養療法，外科的治療を組み合わせたコントロールが行われている．そのため，医師，看護師，栄養士，薬剤師が一体になって行うチーム医療は，病勢コントロールや患者の生活の質（QOL）の向上に欠かすことができない．今回は異なる職種の立場から，IBDのチーム医療の現状について報告する．

演題1：IBD診療におけるチーム医療

東京慈恵会医科大学内科学講座消化器・肝臓内科
松岡　美佳

IBDは原因不明の難治性腸疾患で，近年増加の一途をたどっている．若年者に初発し，一生涯にわたり再発を繰り返すことから，患者のQOLが損なわれてしまうことが大きな問題である．治療法はいまだ確立されておらず根治は困難であるため，治療目標は患者の健康的，文化的生活を保つことに主眼が置かれる．しかし患者は若年者が多く，取り巻く社会状況は様々であり，医師単独での治療には限界がある．

近年，医療現場でチーム医療が注目されてきている．その効果としては医療の質や安全性の向上が挙げられている．我々は東京慈恵会医科大学（慈恵医大）附属青戸病院（現葛飾医療センター）のIBD診療にチーム医療を導入した．具体的な方法としては，チーム医療に必要な要素としてのチームマネージメント，情報の共有化，コミュニケーションに注目して組織作りを行った．とくにスタッフそれぞれがリーダーシップを発揮するようになったことにより，チームの能力は大きく向上した．その結果，患者サービスの向上，患者数の増加，患者満足度の上昇，スタッフの意識の変化などの成果が現れた．

チーム医療はIBD診療において大変有意義であった．今後も医療の様々な分野で導入が進むことを期待したい．

演題2：治療に活かすIBD患者の食事療法

東京慈恵会医科大学附属病院栄養部
猿田　加奈子

IBDは，若年層に好発し，再燃と寛解を繰り返す原因不明の腸疾患である．そのため再燃，寛解に合わせ自分自身の腸の状態を見極め，食事や生活スタイルを調整していく必要がある．

慈恵医大附属青戸病院（現葛飾医療センター）IBDチームでは，栄養士も定期的にカンファレンスやミーティングに参加し，患者の基礎情報の他に，性格や家族背景に至るまで情報共有を行い，栄養指導に役立てた．しかし，指導を行っていくうちに，長期にわたり栄養療法を成功させるためには，他のアプローチが必要であると感じるようになった．そこで，IBDに関する最新情報の提供，患者同士の交流，患者と医療スタッフとの意見交換などを目的とし，平成16年より患者会（腸の会）を開催してきた．会を重ねるうちに，患者参加型の患者会の必要性を感じ，治療と密接にかかわる食事をテーマとし，料理教室を開催した．料理教室という形式をとったことで参加者同士の対話が促され，自身の食生活や療養生活を振り返るきっかけになり，個人の意識に変化をもたらした．また，参加者とスタッフ間に信頼関係を構築させることに繋がり，このことは，参加者の精神的サポート，治療意欲の向上など，行動変容を起こす力になるものと思われる．

また，患者会のひとつである「クローン病～高

校生と家族の会〜」と料理教室に参加し，本人，家族の意識の変化をもたらし，有益な栄養的介入を行う事ができたと思われる症例を紹介する．

演題３：Jonsen4分割表を用いたIBD患者への看護

東京慈恵会医科大学附属病院看護部
和田　美恵

医療チームが患者をより全人的に捉えることを目的に，Jonsen4分割表を用いたカンファレンスが取り入れられている．IBD患者の症例カンファレンスもJonsen4分割表を用いて検討した．その結果，看護の方向性を導くことにつながった．

Jonsen4の分割表を用いたカンファレンスを通して，医師･看護師は見えにくい問題を問い直し，医師・看護師の専門性への期待と疑問を抱きつつも，質の違う会話から生まれる気づきと変化を感じた．そして，Jonsen4分割表を用いたカンファレンスはコミュニケーションを改善する方法としても高い有用性を実感できた．